



次の支援につなげるために 福井県民生協 被災地スタディツアー

田老町漁協の会議室で意見交換した同漁協と福井県民生協の皆さん。前列右から2人目が福井県民生協の松宮幹雄専務理事。その左が田老町漁協の小林昭榮組合長。同漁協の前田宏紀参事は後列左から2人目、左から4人目が福井県民生協の平田周作店舗商品部水産課長。

福井県民生協は2014年度、福島・宮城・岩手の3県を視察し、
これからの復興支援を考える「被災地スタディツアー」を行ないました。
10月11-12日、いわて生協の協力のもと行なわれた同ツアー取材しました。



復興にかける 漁業者の熱意

「被災地スタディツアー」に参加した福井県民生協の役員と組合員の10人は、10月11日岩手県宮古市の田老町漁協を訪れました。同漁協の建屋は防潮堤に隣接し、震災後も長い間、津波被害の爪痕を残していました。2014年の夏に修繕が完了し、外観もきれいになっています。

訪問者の皆さんを前に、田老町漁協の小林昭榮組合長は「田老町漁協はワカメがすべてです」と語り始めました。そのワカメが11年は1袋も出荷できませんでした。生産者を励まし施設の復旧を急ぎ、生産量は震災前の7割まで回復しましたが、販路が減り販売額は5割ほどでしかありません。そんな中で福井県民生協が田老町漁協のワカメをプライベート商品（PB）として取り扱ってくれたのは大きな励みになったと小林さんは言います。

現在の復興状況や、三陸ワカメの特徴についての説明の後、同漁協参事の前田宏紀さんから問い掛けがありました。「私たちのワカメは、どのくらい利用されていますか？ その評価も教えてください」と



ワカメの茎取りの作業を見学。鮮やかな手つきで、早い人は15kgのワカメを1時間ほどで処理する。

それに対し、福井県民生協の参加者は積極的に答えます。「宅配では月2回の取り扱いで店舗でも供給している」こと、「最初はちよつと高いと思っただけど、水で戻したらびつくりするくらい大きくなってポリウムたっぷりだった」「菌ごたえがあつておいしい」「素材が良い商品で、生協で取り扱えてうれしい」という意見もありました。

福井県民生協の松宮幹雄専務理事が、「この商品のフェアをするならいつがよいか」と聞くと、「それは春先ですよ」と漁協の方々は声を揃えます。春の早採りワカメのシャブシャブは、旬の時期しか食べられない貴重なもの。今後はネット通販でも販売を検討していくそうです。



2013年7月から福井県民生協がPBとして展開する
田老町漁協の「真崎わかめ」

3年7カ月という 時の流れの中で

その後、仮設のワカメ加工場での作業を見学しました。その建屋の先では大規模な加工場の工事が進められています。施設工事に補助金が出るのは14年度末の施工完了分まで。「売上が半減し先行きは不透明だが、漁業と町の復興のためには前に進むしかない」。田老町漁協の方々のそんな意気込みが伝わりました。

福井県民生協からの依頼でツ

アーの行程を企画したのは、いわて生協・組合員活動チームの池田亮さんです。池田さんが運転するマイクロ



震災発生直後の写真を見せて被災地を案内するいわて生協・組合員活動チームの池田 亮さん(右端)。



福井県民生協の組合員から、福祉施設で作られた手作りのストラップを受け取るいわて生協・被災地支援担当の飯塚郁子さん(左)。

を聞きました。福井県民生協から、球根を送ってもらい、仮設住宅や障がい者施設で花壇の手入れを通じたつながりが生まれたことへのお礼に始まり、共同購入(宅配)の気仙センターで食材を組合員仲間と分け合った震災当日のこと、センターの職員を「あなたたちが頑張らないと」と言って炊き出しをして励ましたこと、震災後2カ月の5月11日、段ボールを敷いて開催した地域リーダー会では「生協に入っていて良かった」と涙をこぼす組合員の姿を見て、困難な状況の中で支え合う組合員活動の原点を感じたこと、飯塚さんはこの3年7カ月に被災地で起きたことを一つひとつ話しました。そして、今、問題になっているのが、公的な支援制度の規定と現実

バスで、一行は三陸海岸沿いの国道45号線を南に陸前高田へ向かいました。その日の夜、陸前高田市の民宿で、いわて生協・被災地支援担当の飯塚郁子さんのお話

とのギャップです。子育て世代は生活をやり戻そうとたくさん働きたのに、仮設住宅の多くが交通の不便なところにあり、通勤や子どもの送り迎えに多くの時間が取られます。再建の支援金も、家屋への浸水が80cmか1mかで金額が違います。自営業の再建のために一生懸命仕事を掛け持ちしていたのに、再建支援金は店舗部分には適用されないことが分かって、再建を諦めてしまった方もいたそうです。「私たちは現在、被災者再建支援制度拡充の署名活動を進めています。これは、私たち自身のためというより、次に災害が起きたときに同じ思いをしてほしくないという気持ちからなんです」(飯塚さん)

出会った方々への思いを胸に それぞれができることを

翌12日、雲一つない快晴の下、一行は、地元で語り部活動をしている釘子明さんに陸前高田の被災地を案内していただきました。あの日、連絡一つ、ちょっとした判断の違いで多くの人命が左右されました。

国の予算で取り壊し工事ができるのは14年度末までなので、被災した建物は次々と姿を消しています。



陸前高田の語り部、釘子 明さん。震災前は地元のホテルに勤務していた。

「災害に強い街をつくるのが供養になる」という釘子さんご自身は、期限を区切って家賃が上がっていく災害復興住宅を利用するのではなく、自宅の再建を目指しています。池田さんは帰りの車中で、視察で感じたことを自分の言葉で周囲に伝えてほしいと参加者にお願しました。福井県民生協の店舗商品部水産課長の平田周作さんは田老町のワカメについて「なぜ、このPB商品が生まれたか伝えていきたい」と言いました。そして松宮専務理事は、このツアー中に口にされたことを繰り返して言いました。福井に戻った後の地区別総代会で被災者再建支援制度拡充の署名2、500筆を目指そうと。

「福島の子どもも 保養プロジェクト」を 親子の不安を和らげる場に

震災以降、福島県生協連が継続して取り組んできた「福島の子どもも保養プロジェクト」(愛称:「コヨット!」)。東京電力福島第一原発事故後、子どもは被ばく線量を心配する保護者の声に応え、週末や長期の休みに低線量地域での保養を行なってきました。2014年7月からは定期的に「コヨット!保養参加者交流会」を開催し、放射能の問題に悩むお母さんたちの交流の場となっています。

話せないことが一番のストレス

2014年9月30日、福島県郡山市の市民交流プラザで「2014コヨット!保養参加者交流会 in 郡山」が開催されました。この交流会は、ふだんのくらしや子



室内でもできる「落としたら負け」の風船ゲームでは、参加者と事務局と一緒に交流した。

育てていてお母さんたちが自由に語り合い、交流を深めることを目的としています。当日は、日本ユニセフ協会の本田涼子ほんだりょうこさんから、自分を大切にするためのセルフケアや室内でできる遊びなどのレクチャーを受けた後、日ごろ気になっていることについて意見交換を行ないました。

参加者からは「放射能問題の考え方は人それぞれなので、お友達はもちろん、家族の中でも意見が違います。子どもへの影響を不安に思っても、気軽に相談できる相手がいません」「子どもがやりたいと言ったことをつい止めてしまうのがつらいです」「コヨット!」やこの交流会では、自分の意見を否定されないので、ほっとします。こういう場があるのは、

ありがたいですね」などの声が聞かれました。中でも、「周りの反応が気になって、不安な思いを打ち明けられないことが一番のストレス」という発言には、参加者の多くが共感していた様子です。交流会が終わった後も、会場に残り、悩みを話し合うお母さんたちの姿が見られました。

大人も子どもものびのびできる環境づくり

「放射能問題についての意見を言いにくい、という傾向は、時間の経過とともに強まっているように思います。放射能への不安な思いを口にする、福島県の風評被害につながってしまうと考える保護者も多いのです。そうしてたまった親のストレスが子どもを不安定にし、その姿を見て親がさらに不安になる悪循環を繰り返しています。交流会は、ストレスや不安の原因を直接解決できる場ではありませんが、『保護者の居場所づくり』として今後も取り組んでいきます」と話すのは福島県生協連 専務理事の佐藤一夫さとうかずおさん。「コヨット!」の取り組みは親と子のストレスの軽減支援の意義が高まっていると言います。

「コヨット!」では、避難先から被災地へ帰ってきた親子の支援や、「コヨット!」に参加できる子どもたちの対象年齢の緩和、「おもいっきりそと遊びパーク」※2の建設など、不安を抱える親子をサポート



ふだんのくらしで気になっていることを話し合う参加者。

トする環境づくりに今後力を入れていく予定です。

原子力発電所の事故による放射能の問題は多くの人からふだんのくらしを奪いました。福島で暮らす皆さんが、不安を抱え込むことなく、安心して語り合い、リラックスできる場がこれからも必要とされています。

※1 福島大学災害復興研究所、福島県ユニセフ協会との共催で2011年12月から実施。運営費は全国の生協の「くらし応援募金」とユニセフ協会からの募金に支えられている。

※2 週末保養地の一つである「リゾートインぼなり」(福島県耶麻郡猪苗代町)に隣接する沼尻県有林に外遊びができる場を設置予定。自然観察会や木工クラフト作りを通じて、大人も子どもも自然の中で思い切り遊べる環境づくりを目指している。